

③ 仰向け気をつけヌードのエロス度

恥ずかしながら、ジェイムズ・アイヴリーがアメリカ人だったなんて、敦子さんのご指摘ではじめて知りましたよ。てっきり筋金入りのイギリス人だとばかり。「眺めのいい部屋」とか「モーリス」とかの、イギリス好きにはたまらない「イギリス的な」イギリス映画は、なるほど今にしておもえば「イギリスっぽい」映画として観るべきだったんですね。ひやー、足元ぐらり。

それにしても最近の「イギリスっぽい」映画を撮る外国生まれの監督って、経済的に成功してますよ。「エリザベス」と「サハラに舞う羽根」のインド生まれシユカール・カプールも、「ベツカムに恋して」のケニア生まれグリンダ・チャータも、先月発表された「イギリスにおける富裕なアジア人」リストの上位にランク入り。生粋のイギリス人じゃないからこそ、外国人ウケする「ぼさ」の売りどころがわかっているのかな。

まあ、よくできた「ぼい」ほうが、べたな本物よりも魅力的なことって多々あります。サヴィル・ローの世界でも、生粋のイギリス人テラーの作る伝統的スーツよりも、オズワルド・ボートイングっていう黒人テラーが作る「サヴィル・ローっぽいけど異端」なスーツが断トツ人気だし。

ドーバー

越えて

往復連載

齋藤敦子
中野香織



「スイミング・プール」
5月15日よりシネマライズ、シャンテ・シネにて公開



オブジェ制作=井上陽子

服飾史家である中野香織さんと、映画評論家で字幕翻訳家の齋藤敦子さんの往復書簡的コラム。ファッション誌の映画コラムニストとフランス映画社宣伝部員として出会った中野さんと齋藤さんは、以来十数年、友情を育む。この連載では、イギリス文化とフランス映画という専門分野をベースに映画談義が交わされる。

であるように、よくできた虚構のほうが現実よりも魅力的ってのも当然あるわけですが、ああ、だからといってフランソワ・オゾンの新作「スイミング・プール」のオチはアリなのでしょうか？「ビザールな映画」という敦子評、今かみしめております。観た直後はそんなばかなのラストシーンに悶々としたが、2、3日経ってみるとようやく（蛍光灯より遅い）、あれって、退屈でべたな現実から魅力的な虚構を創り上げる作家の創造過程のお話だったのか？と。まあ、映画そのものが虚構なんだから、そのなかでの虚構も現実もないわけですけど。『ガーディアン』紙のピーター・ブラッドショウは「今年もっともけしからぬコップアウト（責任逃れ）」と厳しい批評を書いてますが、「やられた」とうなるか、さもなくば立腹するか、きわどい映画ですね。少なくとも私は、知的っぽいテーマねえと感心はしたんです。男を毎晩とつかえる「ビッチっぽい」サニエちゃんは、ランプリングが枯れ枯れの現実からエロティシズム満開の向こう岸へわたるための横断歩道だった（だから、しましまの水着を着てるし）っていう設定も悪くない。ただ、渡った晩に「寝たまま気をつけ」なヘアヌードっていう「開花」表現はいかがなもの？これこそビザール（＝ぎょつ）。誘惑されたじいさん、喜んでというよりおびえて手が震えてるように見えませんでした？